様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１３３２１

研究課題名（和文）人工妊娠中絶前後の心理状態の把握とサポートの実践

研究課題名（英文）Understanding the psychological state before and after the abortion and practicing support

研究代表者
管生　聖子（Sugao, Shoko）

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授

研究者番号：５０６３７１３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：人工妊娠中絶を経験する親への心理的ケアの実践を行うため、人工妊娠中絶を経験した母親の心理状態を捉える試みを行った。またどのようなサポートが可能かつ効果的であるかを検討した。
臨床心理の専門家が介入を行い（1）人工妊娠中絶を経験した親の体験様式の現れの構造をとらえる，（2)退院後1ヶ月時の心理評価と検討，（3）退院後6ヶ月時の心理評価と検討，以上3点を目的として研究を行った。日本ではこれまでなかった臨床心理学的視座から人工妊娠中絶について検討し社会還元に努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
出生前診断の結果によって人工妊娠中絶をする際の心理ケア体制構築と実践のため，親に対して心理専門家が介入を行い（1）人工妊娠中絶を経験した親の体験様式の現れの構造をとらえる，（2)退院後1ヶ月時の心理評価と検討，（3）退院後6ヶ月時の心理評価と検討，以上3点を目的として研究を行った。日本ではこれまでなかった臨床心理学的視座から人工妊娠中絶について検討した書籍にまとめ広く社会に発信した。また、研究成果をもとに専門職向けの研修や講演も行い社会還元に努めた。
今後、人工妊娠中絶前後の心理的サポートを実践するための人材育成等が期待される。

研究成果の概要（英文）：In order to practice psychological care for parents who experience abortion, the psychological state of mothers who have had abortions was captured. They also examined what kind of support is possible and effective.
A clinical psychologist intervened and conducted the study with the following three objectives: (1) to capture the structure of the manifestation of the parental experience of abortion, (2) psychological evaluation and examination at one month after discharge, and (3) psychological evaluation and examination at six months after discharge.The study examined abortion from the perspective of clinical psychology, which has not been done in Japan before, in order to give back to society.

研究分野：臨床心理学

キーワード：人工妊娠中絶　周産期喪失　出生前診断　心理的ケア　グリーフ　サポート　臨床心理　流産・死産

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

日本の周産期死亡率の低さは世界トップレベルである。しかし，日本産科婦人科学会によると妊娠の 15%前後が流産に至り，厚生労働省によると 2016 年の死産数は 2%の 20,934 件と報告されていた。死産の内訳は自然死産 10,067 件と人工死産 10,867 件で，人工死産（人工妊娠中絶，以下中絶）が自然死産を 800 件も上回っている。人工死産は，妊娠 12 週以降胎児の母体内生存が確実である時に，人工的処置を加えたことにより死産に至った場合を指す。中絶は，妊娠初期の個人的理由によるものがイメージされやすいが，妊婦健診で一般的に行われている超音波診断で妊娠 12 週以降の妊娠中期に母体や胎児の異常が判明し，選択される場合もある。近年実施されている母体血を用いた出生前遺伝学的検査（NIPT）では陽性の結果が出たカップルの大部分が中絶を選択すると報告されている（関沢，2016）。周産期喪失の場合，喪失対象である胎児は家族や周囲にとってまだ見ぬ存在であることから「なかったこと」「早く忘れた方がよいこと」として扱われる（橋本，2004）傾向にある。そのため母親が孤独感を抱くことも少なくない（管生，2008）。周産期喪失時の悲嘆反応は自然な反応であり，申請者のこれまでの研究で，中絶で亡くした子どもに対する愛着やいのちへの感謝などポジティブな心理的側面があることも明らかになっており，医療スタッフや家族をはじめとする周囲との関わりに影響を受けながら心理的な揺れを経て自身の体験を心の内に収めてゆくプロセスをたどる（管生，2017）。しかし，数カ月にわたり顕著な心理的症状が現れるケースもあり（管生，2011），場合によっては悲嘆過程が長期化したり病的なものにつながる危険性もある。それらは後の精神状態や，後の妊娠出産育児，夫婦・家族関係にも影響を及ぼす。

周産期喪失の中でも特に中絶は「自分で選んだ」という思いから，当事者は自らサポートを求めにくいため，中絶を実施する病院などすぐにアクセス可能な場に心理臨床の専門家が配置されていることが望ましい。中期中絶の看護を行う医療者にとっても，心理ケアを実践できる専門家と協働できることは重要な意味を持っている（管生，2017）。また，このように，適切な心理的サポートや心理教育が求められているにもかかわらず，産科医療現場に心理臨床の専門家が配置されていることは少なく，その効果検証が行われることも難しい。海外では，先行研究（Hong et al.,2017・Mojor,2009 など）で中絶後の心理や内的体験についての報告，中絶後のケアについての実践報告がなされ，退院後の継続したフォローへの意識も高い。日本では当事者が幸い入院中に医療者から心理的ケアを受けることが出来たとしても，退院後に継続的なサポートを受けることが困難な現状がある。睡眠や摂食などに顕著な問題が露呈した場合には精神科や心療内科等が受け皿となり得るが，中絶の場合は罪悪感の強さから受診につながりにくく，周産期に特化する状況理解や知識が他科で不足している場合，当事者がさらに傷付く可能性を申請者はこれまでの研究ですでに指摘している。産科医療現場からは入院時や退院後の心理の専門家によるサポート体制の薄さに困惑する声が挙がっているのも現状である。NIPT の実施などを含めた近年の出生前診断後の妊娠中断の選択への心理的サポートの問題にはますます対応が求められることは明らかである。

このような状況から，周産期喪失が起こる医療現場において心理臨床の専門家による介入を行い，当事者やそのパートナーへの心理的サポート体制の構築と実践を行うことは必須であり，またその効果についての評価を行うことが求められていたことが研究開始当初の背景である。

## ２．研究の目的

超音波検査も含む出生前診断技術の進展に伴い、医療看護領域では，妊娠の中断を選択する親や関わる医療者に対して，心の専門家によるサポートが求められているが，臨床心理学領域では周産期喪失に特化したケアの実践研究や人材育成，その効果の評価が未発展である。これらの解消を目指し、本研究では人工妊娠中絶を経験する親への心理的な支援を丁寧に行ってゆくための当事者の心理状態の把握を目的とする。また、サポートの実践を行いその心理評価を行う。

①実践的なケアが今後より広く実施されてゆくため必須となる事例研究を行い，事例の蓄積と詳細で緻密な分析を行う。これまで報告のなかった心理臨床事例から周産期喪失について心理ケア実践の在り方やニーズ，効果が明らかになり，臨床実践に有効な知見を得ることができる。これは，本研究の独自性および創造性であると言える。

②産科医療現場において，縦断的に心理的側面の評価を行う研究はこれまで国内でほとんどされておらず，当事者への心理的ケアは各スタッフの対応に任されているのが現状である。そこで，心理的ケア体制の構築と実践のため，医療現場で心理臨床の専門家による介入をおこない，周産期喪失後 1 ヶ月，6 ヶ月の心理的側面評価を縦断的に行う。

③今後，胎児診断技術がますます発展してゆく中で，医師，臨床心理士（公認心理師），認定遺伝カウンセラー，助産師，看護師等チームによる積極的な心理的サポート提供の体制が構築されることが期待でき，本臨床研究が果たす社会的意義は大きいと考えられる。

④周産期喪失後に十分な心理的ケアが行われることによって，次の妊娠時のマタニティブルーや産後うつ等の防止，育児不安の軽減，家族機能の支援にもつながることが期待できる。

３．研究の方法

人工妊娠中絶の心理的サポート体制の広がりと実践のため以下の方法により 3 点を明らかにする。出生前診断の結果，妊娠中期に中絶を選択する母親とそのパートナーを主な対象とし，
調査①カウンセリングを実施し，事例研究によって体験様式の現れの構造をとらえる。心理臨床の専門家の介入によって得られる効果がどのようなものであるか分析し，今後広くカウンセリング実践がされるために事例分析を行う。
調査②退院後１ヶ月時の心理的側面について質問紙を用いた調査を行い分析，検討する。
調査③退院後 6 ヶ月時の心理的側面について質問紙を用いた調査を行い分析，検討する。

＜１＞対象
出生前診断の結果，中絶を選択する，もしくは選択した妊産婦およびそのパートナー。
＜２＞募集方法
対象妊産婦に対し，本研究について口頭および文面にて説明し調査協力を依頼した。
＜３＞デザイン
調査協力の承諾が得られた，中絶を実施する妊産婦及びその家族(主にはパートナー)に，中絶前後の検診時や入院時に，尺度を用いて心理状態を把握する。また，臨床心理士外来でカウンセリングを受ける妊産婦およびパートナーで，調査協力の同意がられたケースについて事例研究を行った。同じ周産期喪失経験であっても，どのような要因が数値に影響するか等を検討し，心理的サポートの介入の必要程度や心理カウンセリングのニーズや効果等を把握した。なお，倫理的配慮を十分行い研究を遂行した。

４．研究成果

研究は Covid-19 の影響を受け予定していた最終年度を 2 度延長することとなった。

本研究では，出生前診断の結果によって人工妊娠中絶をする際の心理ケア体制構築と実践のため，親に対して心理専門家が介入を行い、人工妊娠中絶を経験した親の体験様式の現れの構造をとらえること，心理評価と検討を行った。医療機関がフィールドであったことから Covid-19 の影響を受けフィールドでの調査が難航したものの，おおむね研究計画の通り完了できた。

研究の成果は学会発表を行った後，国内の臨床心理学分野で最も著名な心理臨床学研究で原著論文として掲載されて，高い評価を受け心理臨床学会より 2022 年度奨励賞を受賞した。

また，心理評価とその検討に関しては当初予定していたサンプル数には達しなかったものの，得られたデータを解析し、国際学会での発表を行った。

さらに，日本ではこれまでなかった臨床心理学的視座から人工妊娠中絶について検討した書籍の出版を果たし，研究成果をもとに専門職向けの研修や講演も行い社会還元に努めた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>安元沙織・管生聖子 | ４．巻<br>62 |
| ２．論文標題<br>死産を通して変化する夫婦の絆を理解するための研究 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>母性衛生 | ６．最初と最後の頁<br>822-827 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Shoko Sugao, Kei Hirai, Masayuki Endo | ４．巻<br>10 |
| ２．論文標題<br>Developing a Comprehensive Scale for Parenting Resilience and Adaptation (CPRA) and an Assessment Algorithm: A Descriptive Cross-Sectional Study. | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>BMC Psychology | ６．最初と最後の頁<br>1-14 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1186/s40359-022-00738-3 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>管生聖子 | ４．巻<br>38（５） |
| ２．論文標題<br>死んでしまうことはもうわかっている」わが子を「産む」母親の語りの分析 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>心理臨床学研究 | ６．最初と最後の頁<br>400-410 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>管生聖子・Wretmark Astrid | ４．巻<br>23 |
| ２．論文標題<br>スウェーデン医療機関における周産期喪失ケアへの多職種連携 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>大阪大学教育学年報 | ６．最初と最後の頁<br>127‐136 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.11501/4428611 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Shoko Sugao |
| 2．発表標題<br>oicing the self -One case study of psychotherapy after perinatal loss.  Symposium  Polyphony in the context of psychosocial practice: on the possibility of the dialogical logic. |
| 3．学会等名<br>11th International Conference on the Dialogical Self（国際学会） |
| 4．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>原武也、味村和哉 、八木太郎 、山本実咲、 小川美祈、 祝小百合 、谷口茉利子、川西陽子、中塚えりか1、三宅達也、瀧内剛、遠藤誠之、永井真理子、 米井歩 、佐藤友紀、酒井規夫、管生聖子、 白神美智恵、 望月秀樹、 木村正 |
| 2．発表標題<br>当院における NIPT の実施状況と チーム医療の役割 |
| 3．学会等名<br>日本人類遺伝学会 |
| 4．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>中島賢・管生聖子・松村憲 |
| 2．発表標題<br>心理臨床における“見えない”身体について今一度取り組む |
| 3．学会等名<br>日本心理臨床学会第38回大会 |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>米井歩・佐藤友紀・遠藤誠之・管生聖子・金井講治，中本剛二，安井眞奈美 |
| 2．発表標題<br>多職種連携型グリーフケアへの試み |
| 3．学会等名<br>第43回日本遺伝カウンセリング学会 |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Shoko SUGAO |
| ２．発表標題<br>Psychological Aspects of Perinatal Loss and Psychological Support Needs-The perspective of resilience and trauma- |
| ３．学会等名<br>The 19th Congress of the International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>管生聖子 |
| ２．発表標題<br>医学的理由により人工妊娠中絶をした母親にとっての「共有」体験についての一考察　　―現象学的手法による分析の試み― |
| ３．学会等名<br>第15回日本質的心理学会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>管生 聖子 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>大阪大学出版会 | ５．総ページ数<br>204 |
| ３．書名<br>人工妊娠中絶をめぐる心のケア | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Masayoshi Morioka, Kakuko Matsumoto, Koichi Hirose and Shoko Sugao | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>Creative Commons | ５．総ページ数<br>445 |
| ３．書名<br>Dialogicality. Personal, local and planetary dialogue in education, health citizenship and research. | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|